

## 47. ラバウルとソロモン群島

この表題を見て即座に‘ラバウル航空隊’  
‘ラバウル小唄’が歌えればもう後期高齢者でしょう。年輩の方には懐かしい南太平洋に浮かぶ島々ですが、第二次大戦中の最大の激戦地であり、太平洋戦争の天王山だったといわれております。

私は何故か戦史が大好きで世界中の戦場跡地や博物館・記念館などを巡るのが最高の楽しみです。ですから欧州や地中海アフリカの各地に残る戦跡は大部巡りました。

第二次大戦で枢軸国と連合国が戦った処はロシアやバルカン半島を除いて交通網・宿泊設備や治安が良好な処が多く旅行し易かったからです。

ところが日米の激戦地は海上が多かったのと陸上戦でも孤島や未開地が多く、交通手段がないのです。特に最大の激戦地であったガダルカナル島やインパール作戦がおこなわれたチンウィン川上流に行きたくとも近づくことも出来ません。

未だ渡米する前で血の気ばかりが先行し肩で風きるマドロスさんなんてイキがていた頃、なんとか行く方法はないかと考え、ニューギニア方面かソロモン群島方面に就航する船はないか船主団体事務所に行って調べたところ、南洋諸島方面へ専門に就航している小さな船会社が瀬戸内にありました。そこで早速会社を巡り臨時の船員で雇ってくれないか、1, 2 航海で良いですからと頼んだところ、航海士や機関士は予備員がいるのだが、通信士の交代要員がいなくて困っているとの返事、もし局長で乗船して頂けるのなら、後2週間くらいで船が内地に帰ってきますから、そしたら局長と交代して乗船して下さい。有給休暇が終わったらまた乗船させますからその間だけ、と反対に懇願される始末、シメシメとばかりに交代乗船、更に幸運なことには次航寄港予定地はラバウル・キェイタ・ソロモン群島方面とパプアニューギニアのアイタペ・ウェワク・ラエ・そして最終港がポーモレスビーと理想のラインアップ、激戦地ばかりです。天にも登る気持ちとはまさにこのこと、しかも港湾設備が劣悪な地ですから、停泊日数が多く、さらにこの時は荷役と直接関係ない局長でしたからそれだけ自由行動がとれるのです。



航路は内地から殆ど真っ直ぐに南下、オーストラリア東海岸への航路と同じですから馴れた航路です。途中マリアナ群島の東側を南下、アナタハン・サイパン・テニアン・グアムと激戦の島々の沖合を通過、帝国海軍の南方一大根拠地であったトラック環礁、かつては海軍精鋭艦が錨泊していた環礁も今は何もなく、数多くの沈船が英霊とともに海底に眠っております。 其の環



③

礁を抜けて船は南下を続け、出航以来6日めの夜に第一寄港地ラバウル港外に到着、翌早朝ラバウル噴火湾に入ると広々とした内湾で、初めての港ですが懐かしさを覚えます。それはそれ迄に何度も写真や地図をみており、憧れの地でしたから頭の中に全てがインプットしているので故郷へ帰ってきたような感じです。

岸壁は海軍が造った浮き桟橋があるだけ、そこに接岸、入港初日は雑用があり、夕方上陸したタクシーが客待ちしていたので明日戦跡巡りをしたいので貸切にならないかと尋ねたところ、年輩の運転手氏は海岸近くにある海軍の飛行場ばかりでなく、山にある陸軍の陣地もみたいならタクシーでは駄目で四駆のジープにしる、オレの自家用があるから案内してやるとのこと



④

商談成立、翌朝迎えにきたジープに乗って山地の密林にある陸軍陣地に向かいました。運転手氏の話では日本軍が去った後はオーストラリアの植民地となり義務教育はオーストラリア人の教師がきて教えてくれたとのこと、ですから会話には不自由しなくこちらの質問に対して知っている限り教えてくれました。陣地跡は全く放置されたまま熱帯の植物が繁茂していますから近寄ることも出来ないような凄い密林です。



⑤

私がラバウルに行ったのは戦後20年経た頃なので、かつて海軍の設営隊が密林を切り開いて造った飛行場ですから放置すれば元の密林になるのは当然かも知れませんが、熱帯雨林の回復の早さには驚きで、嘗ての南飛行場と北飛行場は完全に密林と化しておりました。

ただ丘の上にあった西飛行場は草が生い茂っていましたが原型は止めており、小さな集落があり、一部が畑になっておりました。

花咲山（日本軍が付けた名前）の麓にあった東飛行場は海軍戦闘機の基地でしたが、当時を偲ばせるものは全く何も残っていません。大地が火山灰地なので僅か雑草があるだけで滑走路は連日のスコールによって溝ができ富士山麓のような荒地になっておりました。飛行場跡地の外れに熱帯疎林があって、その一角に慰霊塔と忠魂碑が建立されており、遺族や戦友達が船や飛行機をチャーターして慰霊にくるそうです。そこで墓守をしている一家がおり、家長であるオジイサンは水交社（海軍士官のサロンの集会所）でボーイとして働いていたそうで、貴重な話を大部してもらいました。

かつての日本軍はここラバウルを一大要塞化し米軍の反攻をここでくい止めようと準備し、食糧も自給自足できるようにいろいろと試み、稲作も試みたようですが火山灰でできた地質のため巧くいかず、成功したのはサツマイモを筆頭にイモ類は育ちが早く、収穫量も多かったようで、将兵の腹を充たしていたようです。

日本軍が去った後、それまで無かった種々のイモ類やキュウリ・ナス等の野菜の種が残され、それらを栽培する原住民がふえてそれまでの食生活に一大変革があったと運転手氏は言うておりました。



⑥

更に戦時中、軍に徴用された静岡県下の漁船がやってきて、ラバウル周辺海域でカツオの一本釣り漁を行い、軍に納めて兵士の食糧としておりましたが、その漁船に漁師の補助として現地の人達が雇われ、そこで漁法を覚えた人達が、自分たちだけで漁業を始め、今では日本から買い付けに来るようになって日本との関係はまだ続いているよと笑っておりました。

このラバウル周辺はビスマルク諸島と言いますが、ドイツの熱血宰相ビスマルクからの命名で第一次世界大戦まではドイツの植民地だったのです。この周辺の島々はオランダ人が発見したのですが、火山島が多く役立たずと放棄、欧州列強に比べ植民地獲得競争に大幅に出遅れていたドイツ（当時はプロシア）はこれらの島々を丹念に拾い集め植民地にしていたのです。



⑦

ところが第一次世界大戦でドイツは敗戦国となり、これらの島々を放棄し、その後はオーストラリアの保護領となったのですが、当時はオーストラリア国自体

が英王室が支配する英連邦の一員でしたから、これらの島々を保護することにあまり乗り気では無く殆ど放置していた状態でした。それでドイツの人達も敗戦で混乱している本国には帰らず、現地にそのまま居付いた人が多かったようです。ですから私が行ったときにも各地の小さな村落にはドイツ人

の牧師さんがいた教会が残っておりました。

ハワイ真珠湾攻撃で始まった太平洋戦争ですが、米太平洋艦隊を壊滅させてから南方の油田地帯を確保するのが主眼でしたから、陸軍はフィリピンのマニラ湾の入り口にある米軍コレヒドール要塞の攻撃、イギリスの牙城シンガポール攻撃、オランダ軍



が護る油田地帯のパレンバンへの落下傘降下。海軍はアジアに派遣されているイギリス艦隊とオランダ艦隊の撃滅を主眼として作戦を遂行、それぞれ初期の作戦は成功し、その後ハワイを攻撃した第一機動艦隊はインド洋に進出、セイロン島にあった英国インド洋艦隊の根拠地ツリンコマリーを攻撃、艦隊と根拠地施設を壊滅させ意気揚々と内地へ帰還しています。

全てが予期以上の成果を挙げ破竹の進撃に米英なにするものぞという慢心が芽生えてきたのはこの頃です。

ところが開戦から僅か四ヶ月目の4月18日アメリカの爆撃機が飛来し帝都(当時東京をそう呼んでおりました)に焼夷弾と爆弾が投下したのです。詳しく言えば、空母ホーネットより発進したドウリットル中佐を指揮官とする16機の陸軍中型爆撃機‘B-25’が日本本土を縦断して中国本土国民政府軍が支配する地域で不時着するという大胆な作戦です。海軍の航空母艦に陸軍の爆撃機を搭載し、これを発艦させ、空母は直ちに引き返し戦場から離脱させるという奇抜な作戦で、陸海軍協同など日本軍ではまず考えられない作戦でした。

この空襲で虚を突かれて衝撃を受けたのは軍上層部で、全く反撃できないまま全機飛び去ってしまうという大失態ですから軍の威信は丸つぶれです。

そこで絶対国防ラインとして北はアリューシャンから南は内南洋までの絶対国防圏を構築しようとして開戦前の要綱にはなかった第32話で述べた「AF・AO作戦」を急遽実施することになったのです。しかし急に立案した作戦にはどこか欠陥があります。絶対的優勢な大機動艦隊で襲撃しながら判断ミスと錯誤の連続でミッドウェー海戦はまさかの大敗、見事なくらいの負け戦で正規空母4隻(赤城・加賀・飛龍・蒼龍)沈没、喪失機数285機、かつ鍛え抜かれた百戦錬磨の搭乗員559名を一挙に失い、開戦半年で暗雲が漂い始めたのです。

ここでもう一つの痛恨事はアリューシャン作戦は成功したのですが、重大なミスをしてしまったのです。AO作戦には空母 隼鷹・龍驤が参加、ダッチハーバーの米軍基地を爆撃しました。

この時 龍驤を飛び立った護衛戦闘機のうち零戦一機が対空砲火を被弾し、帰途に就きましたが、力つきて途中の小島のツンドラに不時着、パイロットは機上戦死、そのときおそらくツンドラ地帯を上空からみて草原と思ったのでしょうか、足を出して着陸を試み、ツンドラ地帯に足を出して着陸すれば間違いなく足を取られて反転してしまいますから、胴体着陸が基本ですが、が、身体に被弾しており朦朧としながらの操縦でしたから足を出してしまったのでしょうか。この未帰還機があったことで捜索機が飛び立ち、これは救助の為ではなく、不時着機を銃撃し炎上させるため、これは米軍に捕獲

されその性能が明らかになることを防ぐためですが、ツンドラの上に反転してひっくり返っていたため発見できず、諦めて空母艦隊は戦場を離脱しております。この零戦は後日 米軍が発見、水を含んだスポンジ状なのがツンドラですから、零戦は無傷で反転していただけて悦んだ米海軍はこの1機を回収するために機動艦隊を派遣、丁重に米本国に運び、実際に零戦を飛行させあらゆる角度から零戦の弱点を探し出し、調査研究を徹底的に試みております。

これは開戦以来圧倒的な強さを発揮する零戦の性能に肝を潰し、これを封じ込めるにはより強力な戦闘機を開発するのが緊急の課題だと、そのためには無傷の零戦を鹵獲をしてその性能を分析する必要があると判断し狙っていたのですから、米軍にとっては最高のプレゼントになってしまったのです。

その結果、開発中の‘F6F-3 ヘルキャット’を更に改良を加えて旋回性能とダイブの性能を改良し、更に零戦よりはるかに強力な2000馬力のエンジンを搭載して、それまでの一撃離脱戦法を止め格闘戦が出来るようにしたのです。昭和17年10月3日初飛行に成功、量産体制に入って翌18年にはソロモン上空に現れ、零戦と対等の性能になり、やがて零戦を上回るようになってきたのです。しかも補給は潤沢に為され、パイロットは定められた出撃回数を行うと休暇が与えられ、かつ後方勤務に就くというパイロットを温存する制度を執っておりました。一方我が国海軍パイロットは交代なし、戦死するまで酷使する言葉は悪いですが消耗品扱いです。更に不思議なのは米軍は陸・海軍の航空機が参戦しておりましたが、我が方は海軍の航空機のみが戦い、陸軍の飛行機は全く参戦しておりません（海軍は航空機、陸軍は飛行機と呼称しておりました）。アメリカとの戦いを待ち望んでいた陸軍は、いざ戦争が始まるとソロモン海方面戦線には1機も出撃させようとしなかったのです。これは陸軍の飛行機は洋上航法の訓練を全くやっていなかったのですから参戦しようにも飛行できない状態でした。陸軍はアメリカとの戦争を切望し、主戦場が太平洋であることを十分に承知しながら、実はその戦争準備を全く怠っていたのですからかけ声ばかりで本気で戦争をやる気でいたのか疑わしいものがあります。

次の項で述べるニューギニア戦線になってやっと少数の陸軍機が参戦しましたが、この戦線は陸上戦でしたから参戦できたのですが、それもほんの僅かな戦隊だけでダンピアの惨劇で壊滅しております。

対米戦に関し陸軍の杜撰さを表わす一例を陳べましょう。対米戦が計画された頃、昭和天皇から下問された際、参謀総長だった杉山大将が「三ヶ月で片付けます」と奏上しております。これに対して天皇より更に「前の奏上の時、シナ事変は一ヶ月で片付けると言ったではないか、それが未だ続いているはどうしてか」とお叱りの御言葉があり、それに対し「シナは奥地が広いもので」と答えたのに対し、「太平洋はもっと広い」との御言葉に対して答えに窮しております。実際自信を持てる作戦要綱などなく、大和魂を持ってすれば何とかなるという精神論だけだったみたいで、この程度が陸軍の中枢でした。

ラバウルの話に戻しますと、何故 絶対国防圏を大きくはみ出したラバウル周辺まで戦線を拡大しまでやろうとした作戦は何なのか、其れは米濠分断作戦という途方もない遠大な作戦計画で、戦前

の参謀本部における作戦計画にはなかった事項です。

ところが初期の勝利が冷静な判断を更に誤らせ絶対国防圏としていた範囲より大きく突出したラバウルに要塞基地を造り、ここを拠点としての米濠州断作戦を策定、作戦の狙いは米濠連絡線遮断、濠州の対日反攻基地を阻止して連合軍の統一戦線から脱落させ、戦局を一層有利に導こうとする戦略を、わが国戦争指導部は自信をもって企図したが、非力な国力と潜在的軍備力不足、脆弱な補給力、継戦能力を勘案したら不可能なのは一目瞭然、なのに作戦参謀が立案し、遂行を命じた戦争指導部が存在したのが我が国の悲劇です。火山島が多いソロモン群島の中、唯一飛行場建設が可能な平地のあるガダルカナル島の占拠と海軍基地の建設が可能なパプアニューギニア唯一の天然の良港ポートモレスビー侵攻作戦、この攻防戦こそが日米対等の力で戦った半年間であり、一大消耗戦で補給路が伸びきり、断ち伐られてしまった我が軍はやがて押し戻され敗れ去る運命にあったのです。

この方面の作戦に執着したのはガダルカナル島に強固な飛行場を建設し、かつポートモレスビーに海軍の艦船を収容するベースを造り、1年位後に反撃して来るであろう米軍は濠州を拠点とするどころから米濠の連絡路を遮断する必要があり、その基地としてこの2点に執着したのです。

しかし、冷静に判断して補給路が伸びきってしまい継戦能力がないにも拘わらず戦線拡大の作戦継続を命じた軍中枢の判断、しかも絶対国防圏を大きくはみ出しているにもかかわらずこの無謀とも言える作戦の強硬ですから敗退は必然です。

南進論が確定的な時点でも、参謀本部、軍令部ではソロモン群島やパプアニューギニアが主戦場になるだろうとは想像もしていなかったようで、その兵要地誌研究は全く白紙状態でいきなり戦争状態に突入したのですから、でたとこ勝負の無茶苦茶な作戦です。

ガダルカナル島に飛行場を建設するために設営隊と若干の警備隊が派遣され、1ヶ月後戦闘機が着陸できる程度の滑走路が出来たその時、米正規軍の上陸部隊が突如攻撃してきたのです。小銃程度しかない我が軍はジャングルに逃げ込むのがやっと、この情報は直ちにラバウルの司令部に報告されたのですが、威力偵察程度の小部隊と判断した陸軍司令部は南方方面軍の一木大佐率いる小部隊を派遣、3日で全滅、次は川口支隊を派遣、これも壊滅、これではならじと暗夜にまぎれて第二師団を上陸させ反撃にでたのですが、補給がままならず、海軍の護衛も巧くいかず輸送船が次々と撃沈され、かつ海軍もソロモン群島沖合で米艦隊と遭遇し、数限りない海戦が行われ、数多くの艦船が海底に沈んだのです。

これら海軍、陸軍とも艦船の出撃基地はラバウルで、援護の戦闘機、爆撃機ともラバウル基地から飛び立っております。

ガダルカナル島に上陸した第二師団の攻撃目標はヘンダーソン飛行場基地の奪還でしたから決死の突入部隊を会津連隊の兵士が選抜され、突入に成功し飛行場の一部を占拠しましたが後が続かず決死の伝令が撤退を伝えております。補給が途絶えたガダルカナル島は戦闘よりも餓え死にする兵士が増えガ島（餓島）と言われる位の悲惨な闘いとなって、遂に全軍撤退を決め（ケ号作戦）暗夜駆逐艦多数が沖合に集結、昭和18年2月 陸軍兵士を救い出しラバウルに無事戻りましたが、帰還した兵士は

出征した時の 1/3 以下になっておりました。海軍も連日ラバウル基地から出撃、艦艇もソロモン海域で血みどろの戦をしており、前線視察と激励に訪れた連合艦隊司令長官山本五十六大将搭乗の一式陸攻が双胴の悪魔 P38 ライトニングの待ち伏せ攻撃により撃墜され、戦死（海軍甲事件）しております。

日本側の暗号無線が解読されていた証ですが、軍上層部は暗号が解読されているとはやや疑念があった程度で、海軍が開発した暗号には絶対的な自信を持っておりました。また日本語は難解だからアメリカ人には理解できないだろうという変な自信があったのです。ところが米軍は開戦と同時に日本語学校を開設、大卒の若い将校を集めて徹底的な語学教育を実施しております。それに対して我が国は英語は敵性語として禁止しておりますから情報軽視も甚だしいものがあります。また米軍には参謀本部の一部局として情報部があり、その部局に属する SIS (Signal Intelligence Service) という部門があって、その部門には暗号解読の天才がおり、子供の頃から暗号に興味を持っていて、大人になっても暗号解読が唯一の趣味という一民間人を軍がリクルートし、海軍中佐に任官させ暗号解読だけに専念させたのです。その結果 わが陸海軍が使用する暗号の解読に成功しております。外務省の暗号は戦前から解読されており日米交渉は全てアメリカ側に筒抜けだったことは戦後アメリカ側が明らかにしております。一方、我が国はアメリカ側の暗号解読は全く出来ておりません。軍人の通弊としてハードの面には積極的でもソフト面ではからきし弱かったようです。

情報に関してもう一つ紹介します。カルフォルニア州バイロンに秘密捕虜尋問センター（暗号名トレイシー）があり、各地で捕虜になった陸海軍将兵の中から重要情報を持っていそうな捕虜を選抜して収容し、大学の心理学者、カウンセラー、情報将校等がチームを組んで尋問にあたり、威圧、暴力は一切用いない、軍人である前に人間として接し、胸襟を自然に開くまで待つという方法で情報を収集し、これらの情報を裏付けるため偵察機が空中撮影し、昭和 19 年の秋から始まった本土空襲のための正確な攻撃目標地図を作製しております。‘生きて虜囚の辱めを受けず’「戦陣訓」などは軍人を縛り付けるだけで、見事なまでの時代錯誤、人間不在を表わしているだけです。人間的にも我が国は破れたり。

余談ですが宣戦布告の交付は攻撃を開始する、つまり攻撃隊の第一弾はハワイ現地時間午前八時丁度と決められておりました。従ってその 1 時間前になる現地時間午後 1 時ワシントンで行われている日米交渉の決裂を宣言、野村大使よりハル國務長官に宣戦布告の最後通牒を交付することを決めておりました。これは攻撃日時を秘匿するため肝心の外務省にも知らせておりません。驚くべき事には全権大使にも知らせてないのです。従ってワシントンの日本大使館は通常の日曜日として全員休日、大使をはじめとする幹部は関係者の葬儀に出席、他の職員は旅行に出かけたりして全員自宅に居なかったのです。

しかしいくら連絡がなかったとはいえ日米交渉が緊迫しているとき大使館員が全員が大使館に居ないとは緊張感が全くありません。宣戦布告の最期通牒は民間の電報局を通じてきますから、長文である電文はバラバラに着信し、その都度配達人が配達するのですから時間がかかりしかもその暗号文を

翻訳し、其れを正式の英文にしてタイプして公文書にしなければなりません。しかし専門のタイプストも休みです。それでタイプのできない随員がタイプしましたから交付時間が大幅に遅れ、ハワイパールハーバー攻撃開始から55分（現地時間午後2時55分）遅れてしまい‘卑怯な日本軍のだまし討ち’と世界に喧伝される結果となり、リメンバーパールハーバーが合い言葉となってアメリカ国民を奮い立たせてしまったのです。

しかし一寸考えてみて下さい。我が国の外交暗号はアメリカ側は完全に解読しており、日米交渉の手の内は全てアメリカ側に筒抜けでしたから、最後通牒も電報局に潜り込んでいた諜報員より国務省に報告され日本側より先に翻訳され大統領に報告されております。さらに電報の配達員を足止めし配達を遅らせていますから、ルーズベルト大統領、ハル国務長官その他政府首脳は開戦は事前に承知していたにも拘わらず、何故かハワイの陸海の司令部には連絡しておりません。この事は戦後大部論争になりましたが、藪の中です。

勘ぐれば日本軍のだまし討ちを喧伝するための沈黙だったのか政治とは凄いものです。もう一つ陰謀説を裏付ける事実があります。それはドゥシャン・ポポフというドイツとイギリスの二重スパイで第二次大戦前活躍した最優秀なスパイですが、家族も周囲の人も誰もがスパイだとは気付かなかった位の凄いスパイで、映画「007」のモデルだと謂われております。このポポフがリスボン（ポルトガルは中立国だったため両陣営の情報機関があった）にあったドイツ情報部から重大な使命を課せられました。それは日本海軍の依頼でハワイに潜入して、パールハーバーの米艦船の停泊状況、湾内の水深、施設、燃料タンク等を調べ報告せよ、との重大任務ですが二重スパイですから、この件は早速イギリス情報部に報告されております。勿論ドイツ情報部としてはポポフが二重スパイだとは全く気が付いていません。この重大な情報に驚いたイギリス情報部は直接アメリカ情報部へ伝えるよう手配しており、紐育でFBI長官フーヴァーに会って直接報告し日本海軍のハワイ攻撃近しと伝えており、この報告はハワイ攻撃の3ヶ月も前のことなのです。この事実は戦後アメリカ国内で論争になったのですが、それはFBI長官フーヴァーがどこまで報告したのか、報告の相手が誰なのか、大統領だけに報告したのか、側近に報告したのか何故か判らなくなっており、意識的に隠してしまったのではないか、疑いは濃く日本政府の方が翻弄され続けてきた感じです。

さらにもう一つ太平洋戦争の第一弾の発射は米海軍です。パールハーバー湾口沖合を哨戒遊弋していたウィックス級駆逐艦ウォード（1220排水トン、艦籍番号139）が湾内に忍び込もうと防潜網を避けるためタグボートの後を潜望鏡だけを出して追尾していた特殊潜水艇を発見、これを砲撃と爆雷（ハワイ時間午前7時15分頃）で沈めています。この時間は我が海軍攻撃隊が攻撃開始（ハワイ時間午前8時）する45分前です。

しかしこの攻撃は直ちに報告されていたにも拘わらず海軍司令部の上層部には報告されておられません。司令部の当直士官が誤報として握り潰してしまったのです。この事実は戦後特殊潜水艇が海底から引き上げられ砲撃の跡があった事によって明らかになったのです。

結局はハードでもソフトの面でも大幅に劣っていた我が軍は補給が续かなくなり、やがて飛べる航



空機が零になり、沈黙すると米軍はラバウルを素通りして蛙跳び作戦を実施します。これは我が軍の基地のある島々を無視してより我が国に近い拠点に占領して進撃拠点を確保していく蛙跳びです。要塞を構築して待ちかまえていたラバウルの様な島々は肩すかしとなり、米軍侵攻の遙か後方に取り残されたのですから、要塞・基地としての役割は何もなくなってしまったのです。

(解説)

米会談 (於ワシントン 全権野村吉三郎：ハル国務長官)

アメリカ側の対日要求：ハルノート

その要旨 (アジア歴史センターから索引)

第二項 合衆国政府及日本国政府ノ採ルヘキ措置 (旧カナズカイ)

一、合衆国政府及日本政府ハ英帝国 支那 日本国 和蘭 泰国及合衆国間多边的不可侵条約締結ニ努ヘシ。

三、日本国政府ハ支那及印度支那ヨリ一切ノ陸海空兵力及警察ヲ撤収スヘシ。

四、合衆国政府及日本国政府ハ臨時ニ首都ヲ重慶ニ置ケル中華民国政府以外ノ支那ニ於ル如何ナル政府若クハ政權をも軍事的、経済的ニ支援セサルヘシ。

九、両国政府ハ其ノ何レカ一方カ第三国ト締結シオル如何ナル協定モ同国ニ依リ本協定ノ根本目的即チ太平洋地域全般ノ平和確立後保持ニ矛盾スルカ如ク解釈セラレルヘキコトヲ同意スヘシ。

◎ 合衆国：アメリカ。英帝国：イギリス。支那：中国。和蘭：オランダ。泰国：タイ。

以上の国々と不可侵条約を締結することを要求。

印度支那：当時のフランス領インドシナ、現在のベトナム、ラオス、カンボジア。

◎ 中国全土及びフランス領インドシナから完全撤兵、警察組織も完全撤退要求。

◎ 当時重慶にあった中華民国政府 (国民党主席蒋介石) を中国の正当な政府として認めることを要求しており、他の政權 (当時中国内に南京政府 (主席王精衛) その他各地に政權があったのです)

◎ 敵対する日独伊三国同盟の破棄を要求。

その他にも厳しい要求がハルノート、ABCD ラインの経済封鎖による要求に我が政府は悲憤慷慨するだけで、その裏に潜むアメリカ側の謀略に気が付く情報分析は全く行われておりません。また全権大使である野村吉三郎氏は海軍大将で外交官ではありません。

この様な国家の命運をかける日米会談に外交の素人をあてる日本政府の真意は何処にあるのか判りません。アメリカ側は外交の超ベテラン ハル国務長官とルーズベルト大統領ですから最初から勝敗は決まっているようなものです。更に不可解なのは全権補佐として駐伊大使の来栖三郎氏を任命し、駐米大使は蚊帳の外に置いたのは何故か疑問は際限なく広がります。

写真・絵

① ラバウル周辺とソロモン群島方面、太平洋戦争の激戦地

- ② 西飛行場は一式陸攻・C型輸送機等の大型機専用の飛行場（小高い丘の上にあります）から噴火湾を臨み、はるかに見えるのが花咲山
- ③ 零戦 21 型の残骸、形はありましたが各パーツは全て持ち去られていました。
- ④ 横穴式 海軍の防空壕の入り口
- ⑤ 陸軍のトーチカ、西飛行場に向かう坂道で、‘く’の字に曲がる所に銃眼があり、中に入ると広いコンクリートでできた部屋で 1 分隊（9 名）配置と思います。銃座の大きさからみて多分 92 式重機関銃が配備されていたのでしょう。
- ⑥ 浮き栈橋の近くにありましたから多分海軍の防空壕兼倉庫の入り口です。現在はラバウル市内の商店主が所有しており、中は見せてもらえませんでした。
- ⑦ 南飛行場近くの山腹に横穴を掘り、小型内火艇、通称ダイハツを日中は空襲を避けるためこの穴の中に引き込んでおり、砂浜からこの洞窟まで(約 100m)レールが敷いてあって台車に乗せて海に降ろし輸送船からの荷物を積んで揚げ荷をした。日中輸送船は離れた島陰に避難しており、夜間しか荷役ができなかったのです。レールはもうありませんでしたが、洞窟の中には朽ち果てたダイハツの残骸がありました。湾内には岸壁・栈橋類はありません。ラバウルには陸海軍併せて 10 万人以上の将兵が駐屯しており、ガタルカナル島・ニューギニア、ソロモン群島方面の補給は全てラバウル経由でしたから補給は大変で輸送船の出入りが激しく、それを狙う米軍機と連日激戦が続きました。
- ⑧ ラバウル航空隊の歌で有名なゼロ戦が飛び立った海軍戦闘機の基地、東飛行場の見るも無惨な荒れ地と化した‘強者どもの夢の跡’です。